

SHIRO



4 573636 267421

REPORT

2025

January 2026

2 ORIGIN

点がつながり、円になる
SHIROの現在地

6 ROOTS

目にはみえないものが
暮らしをつくっている

10 FROM THE FIELD

居場所がない人の居場所
ひとりにしないための現場たち





点がつながり、円になる SHIROの現在地

SHIROは変わり続けてきました。
“つくってはこわす、またつくる”その繰り返しのなかで、
コスメティックの枠を越え、国境を越え、
レストランやホテル、財団へと活動の場を広げています。
しかし、日々取り組んでいることをひとつずつ辿っていくと、
その種は、40年以上前にはすでに蒔かれていました。
点のように見えていた出来事が、
振り返ると、ひとつの円を描いている。
SHIROの2025年は、そんな「つながり」に気づく1年でした。

Photographs & Text: SHIN SASAKI

“つくってはこわし、またつくる” SHIROの2025年、そしてその先へ

SHIROの2025年を振り返ってみましょう。4月に韓国初の旗艦店を聖水(ソンス)にオープンしました。9月には、社会課題へ向き合う活動及びその支援等を目的とした「一般財団法人シロ財団」を設立し、最初の助成先の検討がスタート。11月には北海道砂川市にある「みんなの工場」の横に、森の恵みと香りを味わうイノベティブレストラン「MORISHIRO」をオープンしました。そして現在、今秋の再オープンへ向けて「砂川パークホテル」のリニューアル及び、併設されるサービス付き高齢者向け住宅の建設を進めています。コスメティックの分野を越え、また国境も越えて、SHIROの活動が広がっています。

SHIROがこれまで辿ってきた道を振り返ると、“つくってはこわし、またつくる”ことを繰り返してきました。目標に到達すると、すぐに次を目指しなくなってしまうのです。積み木で遊んでいる子どもたちの姿を思い浮かべてみてください。お部屋をつくって遊び、次は家をつくる。一通り遊んだら今度はまちをつくりたい。2009年にLAURELとしてスタートしたブランドは、小文字のshiroへ。そして大文字のSHIROへと成長し続けてきました。こつこつ積み上げたものを、自らの手で一度崩して、再び積み直す。SHIROはおおよそ5年に一度の周期で、大きく変化してきました。LAURELがスタートしたのは2009年、shiroが2015年、SHIROが2019年です。大文字のSHIROが始まって7年が経ちます。新型コロナウイルスの流行で数年足踏みしましたが、そろそろ新しいことに挑戦する時期なのかもしれません。

全力でまだ見ぬ未来へ向かって突進している私たち。でも、はたと気づきました。もしかすると地球が太陽の周りを回っているように、同じ軌道をクルクル回っているのかもしれない、と。レストラン、ホテル、サービス付き高齢者向け住宅、財団、韓国への出店。次々と新たな挑戦をしているSHIROですが、実はこれらの種は40年以上前に蒔かれていたようです。少し時代を遡ってみましょう。



畑からテーブルへ すべては40年前からのつながり

1985年、「株式会社シロ」の前身である、「株式会社ローレル」が創業する前の出来事です。ローレルの創業者・室松敏雄が「室松ファーム」というハーブを栽培する会社を設立しました。ヨーロッパで体験したハーブが日常生活にある生活を日本に根付かせることを目指して、ハーブの苗を通信販売したり、ハーブをレストランに卸販売するなど、農協に頼らない農業を営んでいました。Farm-to-table、畑からテーブルへ。レストランのシェフと直接交流しながら、いち早く、地産地消や安心安全な農作物の生産と流通に取り組みました。

2025年11月にオープンしたMORISHIROには、この室松ファームの意思が受け継がれています。特に意識していた訳ではありません。でも、気がついたら同じようなことをしていました。季節に寄り添い、自然の恵みを料理する。その背景にある森の営みも感じることができるレストランです。監修を手掛けるのは、道産子ガストロノミーの草分け的存在として知られる、レストラン「TAKAO」の高尾僚将シェフ。自ら森を歩いて採取した木の実や、「シロ農園」で育てた野菜を使い、仲間の木こりが間伐した薪の火を使って調理します。Farm-to-tableあるいは、Forest-to-table。室松ファームが取り組んだ、生産者と料理人の親密な関係から生まれる料理を提供するレストランが、40年のときを経て出来上がりました。

室松敏雄は、5人兄妹の3男として、農家の家庭に生まれました。中部工業大学(現中部大学)に進学し、電気工学を学び、その後、農家として働き始め、農作物の栽培だけでは行き詰まりを感じていたときに、姉が住むデンマークへ訪れ、運命の出会いを果たします。旅先で風邪をひいた室松は、姉に連れられて薬局へ行きます。そこで処方されたのは、風邪薬ではなく薬用ハーブやカモミールティーでした。身近にハーブがある暮らしに感銘を受けた室松は、日本にもハーブ文化を定着させたいと考え、種を輸入し、ハーブ栽培を始めました。1985年に室松ファームを創業し、苗やハーブティーをはじめとした加工品、ポプリなどをつくり始めたことが、株式会社ローレルの設立へと繋がっていったのです。

畑の匂いを知っていたから

「室松ファーム」に続いて、1989年に室松敏雄が創業したのが「株式会社ローレル」です。SHIROのファウンダーであり、ブランドプロデューサーを務める今井浩恵は、短大を卒業した1995年に入社しました。室松ファームの繁忙期に農作業に駆り出された今井は、畑にずっと溶け込み、生き生きと土と戯れました。都会育ちの同僚たちが戸惑っていたのとは対照的です。母屋から畑へ向かう小路の脇に生い茂るハーブの香りを嗅いだり、畑で育ったアスパラを取穫して美味しく食べてたり。今井はこの時点ですでに自然と近い距離で関わることを知っていました。

今井の祖母は北海道旭川市で米や野菜を栽培する農家でした。共働きだった今井の両親は、夏休みや冬休みになると祖母のもとに今井を預けました。農家の娘として育った今井の母が、農村よりも都市を好む一方、今井は田畑が大好きで、元気に走り回っていたといいます。そして幼い今井は、どの農家も農地の片隅に小さな家庭菜園を持っていることを知ります。祖母から今井はこう言われました。「色が綺麗で形が整ったトマトだけがおいしいとは限らないよ。家庭菜園の野菜は、無骨だけど野菜本来のおいしさがあるんだよ。」それは化学肥料や農薬などを使わずにつくる昔ながらの栽培方法でした。当時幼かった今井は正確に意味は分かりませんでした。

「生産者と関わる仕事を続けていくと思う」

と、今井は言います。幼い頃に親しんだ祖母との原体験が、就職先選別に影響し、就職した会社の社長の考えが、その後の仕事に影響を及ぼしている。室松の右腕として活躍した今井は、26歳の若さで社長に就任し、自社ブランド LAUREL を立ち上げ、shiro、そしてSHIROへと成長していきます。



今の支援へつながら 40年前の問い “世の中をしあわせにする”ということ

室松は200年以上前にドイツで始まった「クラインガルテン」という農地の賃借制度に関心を持っていました。日本語に訳すと「小さな庭」。畑を耕したり、庭仕事をするなどのレクリエーションや、老後の生き甲斐の創出という役割だけでなく、自然環境を保護し、子どもたちへの豊かな自然教育の場として大きな役割を果たしています。室松が特に注目したのは、移民が畑を耕し、地域と交流している姿。学生の頃、海外支援協力隊で訪れた発展途上国の貧困問題を目の当たりにした室松は、東南アジアの若者が日本に滞在しながら、農業の技術を学ぶ施設をつくることを夢見ます。そうすることで東南アジアの発展に寄与できると考えたのです。しかし、「株式会社ローレル」の代では、この夢は実現しないうまででした。

“誰ひとり排除しない”というSHIROの考え方の源流はここにあるのかもしれませんが。時代は選り変わり、東南アジアは経済成長を遂げています。一方、日本の経済は長らく停滞し、日本国内にはさまざまな困難を抱えた人たちが暮らしています。SHIROは、2025年9月に「シロ財団」を設立し、生きづらさを抱えている人々を支援する活動を始めました。今はどんな困りごとを抱えている人たちがいるのか、それをサポートしている人たちはどんな活動をしているのか、そして私たちに何ができるのかを探っているところです。

“世の中をしあわせにする”というSHIROの企業理念。これは製品を使うお客様に限った話ではありません。素材を育てる方々、生きづらさを抱えながら日々を暮らしている方々、そしてこの世界を形づくるすべての動物や植物たちをも含みます。最初に言葉にしたのは今井浩恵です。それまで、はっきりと言葉になってはいませんでした。ローレル時代から大切にされてきた価値観なのです。



受け継いだ想いを世界へと広げながら 同じ場所を回り続けている

2025年4月、SHIROは韓国初の旗艦店を聖水（ソンス）にオープンしました。12月にはLOTTE WORLD MALLに2号店をオープン。海外進出は、2016年にロンドンのキングスロードに始まり、その後、2023年には台湾にもお店をオープンしています。しかし、聖水店のオープンは、SHIROにとって大きな一歩でした。思い出したのは、LAURELとして札幌ステラプレイスに1号店をオープンしたときのこと。2009年当時は、国内外に32店舗を展開するまでにブランドが成長するとは想像もつきませんでした。先日LOTTE WORLD MALLにオープンした店舗の奥行きは狭さは、どことなく、いえ、はっきりとLAURELの1号店を思い起こさせます。2026年、韓国では現地法人を立ち上げ、さらに出店が続きます。15年後にはどんな規模に成長しているのでしょうか。

こうした海外への目線にも室松の影響が強く表れています。室松の姉はデンマークに、妹はアメリカに留学していました。そんな姉妹や、少女時代に海外で過ごした経験のある先進的な考えを持つ母・恒子さんの姿を見て育った室松の思考は日本国内に留まらず、いつも海外を向いていました。出店準備やフィールドワークで国内を飛び回る今井にとって、初めての海外は、仕事で訪れたヨーロッパでした。その後も、見本市を視察するために香港を訪れたり、シアバターを求めてガーナを訪れるなど、旅を続けます。

SHIROは進化し続けてきました。そしてこれからも進化し続けます。つくってはこわす度に、皆様を驚かせたり、戸惑わせたりしてきたかもしれません。きっとこれからも驚かせることでしょう。新しいことを始めるときには、正直私たちに繋がりが見えていません。でも振り返ってみると、バラバラに見えた点と点が繋がっています。SHIROは“世の中をしあわせにする”という言葉の周りを移動し続けています。その考え方は室松敏雄や、さまざまな出会いや気づきから受け継いだもの。そして、次の世代へと受け継がれていくものなのでしょう。

目には見えないものが暮らしをつくっている

どんな仕事も、どんな生き方も、きっかけはいつも小さく、目立たない。光に足を止めた瞬間。花に触れた時間。名前も知らない人たちが同時に居る風景。

この特集に登場する6人は、「正解」や「分かりやすさ」よりも、自分が信じた感覚を、時間をかけて引き受けてきた。選んだというより、出会い、迷い、続けてきた仕事と暮らし。

目には見えなくても、確かにそこにあるものが、今日の風景をつくっている。



GRAPHIC DESIGNER



佐々木 信

デザイナー / 3KG 代表

好きなものに、正直に映画館でみつけた自由な道

僕がグラフィックデザイナーになったきっかけは、両親が（おそらく）「創造性豊かに育てて欲しい」という願いを込めて、僕に買い与えてくれた、レゴブロックと、60色のサクラクービーペンシルです。毎日ブロックを組み立て、画用紙に絵を描いていました。誰に教わった訳ではありませんが、幼い頃から形や色の魅力に惹かれていたようです。

そしてもうひとつ、大学時代のアルバイトが僕に大きな影響を与えています。僕はミニシアターで映写技師のアルバイトをしていました。映画館のオーナー夫妻が働く姿を間近に見て「僕も好きなことをやって生

きていこう！」と、迷いが吹っ切れました。サラリーマンと専業主婦の家庭に育った僕は、自分が会社員には向いていないと感じつつも、どこかレールからはみ出せずにいました。映画をこよなく愛するオーナー夫妻の姿を見ると、毎日とても楽しそう。僕は就職活動はしないと決め、専門的な教育を受けていないにも関わらず、自分が夢中だったグラフィックデザインの世界に飛び込みました。デザイン会社の傍ら、お店やギャラリーを構えて、人が集まる場所を営んでいるのは、間違いなく映画館で見た風景の影響です。

佐々木 信 SHIN SASAKI

1974年北海道生まれ。デザイン会社3KG代表。SHIRO PAPERの編集、デザインを手掛ける。『D&DEPARTMENT HOKKAIDO』を運営。子どもと育児中の大人へ向けて「庭しんぶん」を毎月発行。



FLORIST



山下 郁子

BOTANICAL ARRANGEMENTS TSUBAKI 主宰

世の中をもっとうつくしくするために

「花をいける」「庭をつくる」「景色をつくる」という3つを軸に“植物の場づくり”をしています。庭師を父に持った私は幼少期から植物に触れ、美しいものを見ることが大好きでした。小学校4年生から習った生け花の先生は私を仲の中に閉じ込めることなく、行けば孫と会ったかのように喜び可愛がり、花に触れる時間を楽しませてくれました。私は幼少の頃から決めつけられることが苦手自分で考えることを好みました。花選びにおいてもまた、自分が美しいと思う感覚を譲ることはなかったです。先生のおかげもあり、私は花の世界に吸い寄せられていました。

この職業に就き25年経った今、“世の中をもっとうつくしくするために”命を尽すことにしました。私は植物からも人からもたくさんの幸せをもらいました。これからは恩返し的时候了。見るものの叫わぬ未来の人々にも愛され笑顔が続いて「景色をつくる」ことが今の私の夢。大好きな絵本『ルビナスさん』のように美しい景色をつくり、その景色を見た未来の子どもたちがまた“世の中をもっとうつくしくするために”何かしなくては思ってくれることを願って私は精を出して働きます。うつくしいもので人が喜んでくれることが私の生きる喜びです。



アメリカの児童文学作家バーバラ・クーニーの世界を美しくする小さなおばあさんを描く物語（ほるぷ出版）

山下 郁子 IKUKO YAMASHITA

『BOTANICAL ARRANGEMENTS TSUBAKI』主宰。2014年4月創業の植物で場づくりをする宮原史史と山下郁子のユニット。

SOCIAL WORKER



大辻誠司

NPO法人 中空知・地域で認知症を支える会

出会いと、チャンスと、個性と生きた時間と、決断の積み重ね

大学進路時に、野球部の顧問から薦められた社会福祉学部。新たな専門の分野であること、また調べると「誰もが人として、豊かに生きられる社会」のための制度や環境を学ぶ学問だということを知り、進学を決めました。卒業後すぐにソーシャルワーカーになったわけではなく、精神科病院に勤務したことが、いまの道への第一歩だったのです。「人と関わる仕事をしたい」と思い進んだ福祉の分野。

精神病で何年も病と向き合うことは、ある意味ゴールがないものだった。だからこそ一人ひとりの向き合い方や、方法がすべて異なる。そんな風な患者の方々

と寄り添っていく時間は、私自身が描いていた福祉のありかたそのものでした。

そして、若年性アルツハイマー型認知症の松本健太郎さん（52）に出会いました。24年、「希望大使（認知症本人大使）」に任命された松本さん。私が運転手となり、全道各地をめぐるっています。松本さんは、25年11月から「みんなの工場」で働いています。その姿は、認知症であっても社会の役割を持ち続けるという「新しい認知症観」が、企業のと結びついた瞬間です。支援は一方通行ではない。その働く姿が、周囲に勇気や優しさを与えています。「互助」を美談に終わらせるのではなく、持続可能なシステムとして機能させていく。支える・支えられるという境界線が溶け合い、誰もが当たり前そこに居ていいと感じられる地域に。



大辻 誠司 SEIJI OTSUJI

1962年北海道生まれ。営業職を経て88年よりソーシャルワーカーとして歩む。精神保健福祉士国家資格化運動や地域支援を経て06年より「砂川市立病院」、10年から認知症疾患医療センター専従。「NPO法人 中空知・地域で認知症を支える会」活動ほか。

INTERIOR DESIGNER



Lim Taehee

Lim Taehee Design Studio

目には見えないデザイン自然なデザイン

「自然」が私の活動の源です。ある日偶然入ったギャラリーで、白い壁に写し出された光を見ました。そして光に導かれて、美しい瞬間を経験したのです。おそらくその日の感動が導く方向へ向かうことが、今の私の仕事に繋がっているのだと思います。それは決して特別なものではありませんでした。自然の光とランプの光が同時に壁面に映し出され、自然と人間がつくったものが美しく共存しているように見えたのです。時間とともに移りゆく影がつくりだす形が、美しかったのです。平凡かもしれませんが、私はその美しさの正体について思いを巡らせ、試行錯誤を続けています。

最近、韓国の済州島で廃校となった小学校を改装し、幼児のための体験空間を設計しました。自然から遠く離れてしまっている今の子どもたちが、どのように自然と調和し、自然との関係を回復できるかについて頭を悩ませました。その結果、「あなたは一体何をしましたか？」と聞かれそうな、デザインされていない空間になりました。しかし、私たちができることは、原始的な自然への回帰なのではないか。自然を観察し、自然と遊び、自然が感動することを実現したいのです。これからも、そういう仕事を続けたいと考えています。

済州幼児教育振興院ヒェチョン分院
제주아이교육진흥원 히전분원

廃校になった小学校を再活用したプロジェクト。

選んだ仕事ではなく引き受けてつながってきた暮らし

東京で共働きをしていた両親が北海道へと移り住んだ。私が2歳の頃だ。減反政策の中、緑もゆかりもない極寒の地で、まだ一般的とは言えなかった有機農業で生計を立てることは容易ではなかった。木登り、泥遊び、暗くなるまで遊んだ……と言いたいところだが、門限は5時、お米を研いで風呂掃除するのは子どもの仕事。泥だらけで働く両親。身なりは周囲より質素で、成長するにつれ「田舎の農家」を恥じ、サラリーマン家庭に憧れた。高校卒業後は札幌で事務職をしながら夜間大学に通い、営業職に就いた。モノを売るのが大好きで、成果主義の業界に心底やりがいを感じていた。その後シングルマザーとなり看護師資格取得を決意。偶然にも地元の大学に入学することに。卒業後は札幌に戻るつもりだったが、林業に携わる夫と再婚し、地

元に残ることになった。夫のすすめで狩猟を始め、看護師の傍ら、獲った肉をおいしく食べたいと、実家の農園でハーブを栽培し、野菜を採って家に帰る暮らし。そんなある日、「もう看護師やめてもいいかな」と口にした。

天気と観めっこしながら日の出とともに猟に出て、両親と暗くなるまで畑を駆け回り、土日は子どもたちと農作業をしたり、直売イベントに出店したり。自分で獲った肉や、畑で収穫した野菜、そして仲間と物々交換した米や魚で食卓を囲み、みんなに助けられながら暮らしている。大きな決断を重ねてきたわけではない。変化をあるがままに受け入れ、引き受けてきた先に、今の暮らしがあるのだと思う。



福山 萌子 MOEKO FUKUYAMA

1982年東京生まれ。NPO法人もりいく団代表。両親が開設した有機栽培農場「ハーベストガーデン福山」で野菜やハーブを育てながら、ハンターとして地域の有害鳥獣駆除に携わり、「MORISHIRO」ヘジビエを提供。

多様な人が行き交い、自然に集まる寄り添い合う居場所づくり

子どもの頃から、図書館に行くのが好きでした。そこには、本を読む人だけではなく、いろんな人がいました。毎日、公衆電話から長電話をしている女性や広場に小屋を建てて暮らしている男性、室内をプーンと言いながら走り回るお兄さんなど。直接言葉をお互いに交わすことはないけれど、多様な人が同じ空間に、同時に居ることが可能となる場所。それは、世界にはいろいろな生き方や価値観があるのだと、体感的に知る経験でした。私はきっとそんな場所で起こる、予期せぬ風景に魅せられてしまったのだと思います。「どうすれば、まちの中にこういう場所を増やすことができるのだろうか」と大学に入り、それが「公共空

間」や「公共性」と呼ばれるものだと知りました。一方で、まちからは多様な人がともに居る場が減り、社会は逆方向へ進んでいるようにも感じていました。本を読んだり、デモに参加したり、変装してまちを歩いてみたり、気がつけばいつも考えていたり実践する人生のテーマようになっていました。

そんな中、働いてみない？と声をかけてもらったのが「まちなかぶんか小屋」です。ここもまた多様な人が行き交う場所。ここで起きる日々の景色にずっと魅せられています。

竹田 郁 KAORU TAKEDA

まちなかぶんか小屋事務局長。2008年に「ワーカースペースセンター事業団」に入団。異動で旭川へ。主に失業対策事業、自立支援事業に携わる。2015年より、演劇や落語、マーケットなど、文化・芸術をきっかけに人が集うまちなかぶんか小屋に参加。企画・運営を行う。



HUNTER



福山 萌子

Hunter ハーベストガーデン福山

DIRECTOR



竹田 郁

まちなかぶんか小屋



居場所がない人の居場所 「TABI SHIRO」の2人が訪ねた ひとりにしないための現場たち

社会課題という言葉は、

どこか遠くのもののように感じられます。

ニュースで聞くことはあっても、

実感を持つのは簡単ではありません。

けれどその正体は、誰かの孤独や、

言葉にならない違和感として、

私たちのすぐそばに存在しています。

旭川、東京、帯広。

Podcast「TABI SHIRO」MCの2人が

いくつかの場所を訪ね、制度の外側で

人と向き合い続ける人たちに会いに行きました。

Text: HIDEKAZU IZUMI



まちなかぶんか小屋 北海道旭川市



まちの「何でも屋さん」に届くのは 「名前がつく前」の困りごと

社会課題という言葉は、少し距離のある響きとして聞こえます。ニュースで目にするのはあっても、自分の暮らしのすぐ隣にある実感を持つのは、簡単ではありません。SHIROのブランドプロデューサーである今井浩恵とノンフィクションライターの泉秀一は、そうした距離を確かめながら、いくつかの現場を訪ねました。向かったのは、旭川、東京、帯広……。それぞれ異なる場所でありながら、共通していたのは、国や自治体の制度や仕組みだけでは支えきれない現実と、そこに向き合っている人たちの姿でした。

最初に向かったのは、北海道旭川市の中心部にある「まちなかぶんか小屋」です。旭川駅の北口前からまっすぐ伸びる買物公園通りを15分ほど歩いた先、商店がまばらになり始めた通りに、まちなかぶんか小屋がありました。外にはのれんが掲げられていて、赤い布地ののれんに白く大きな「ぶ」の文字。文化の「ぶ」だとは分かっていても、なんだか怪しい雰囲気を感じています。何をしている場所なのか、一見ただけでは分かりにくく、扉の前で一瞬、立ち止まりました。窓ガラス越しに中を覗くと、カラフルで目立つ格好をした50代くらいの女性や、椅子に腰掛けてぼんやり外を眺めている高齢者の姿がありました。家にいるのが寂しくて来たという人もいれば、ただ時間をつぶしに立ち寄ったような人もいます。子どもが遊び、近所のおじいちゃんやおばあちゃんが世間話をしている。目的も立場もバラバラな人たちが、同じ空間に同時に存在していました。

まちなかぶんか小屋は、演劇や映画の上映、トークイベントなどが行われる文化スペースでありながら、それ以外の時間は、誰でも自由に出入りできる「居場所」として開かれています。利用のルールは最小限で、何かをしなくてもいいし、何者かである必要もありません。ここに来る人たちの多くは、支援を求めて訪れるわけでも、明確な目的を持っているわけでもない。ただ、ひとりで過ごす時間が長い、なんとなく誰かと同じ空間にいたい。そんな理由で、ふらりと立ち寄ります。

運営に関わる竹田郁さんは、もともとソーシャルワーカーとして働いてきました。縁あって東京から旭川に拠点を移し、ここではイベントの企画や進行、空間の管理といった日々の運営を担いながら、ここに集まる人々たちから持ち込まれるさまざまな困りごとにも向き合っています。「何か困りごとがあれば、私に電話がかかってくる。まちの何でも屋さんのような状態です」（竹田さん）。

中でそんな話を伺っていると、突然、竹田さんの電話が鳴りました。電話の相手は、「ここをよく利用している人」とのこと。声のトーンから、やや切羽詰まっていることが伝わってきます。ひとりではどうにもならない困りごとが起きたというのです。竹田さんひとりで解決できることもあれば、できないこともある。そんなときは、まちなかぶんか小屋にいる人や、近所のお店の人に声をかけます。専門家ではないけれど、手を貸せる人がいる。全部を抱え込まず、その場にある関係性を使う。まちなかぶんか小屋では、そうした助け合いが、特別なことではなく、日常の延長として行われています。

外から見たときの入りにくさと、中に入ったときの不思議な安心感。その差に、私たちは少し戸惑いながらも、どこか納得していました。社会課題は、最初から「課題」として姿を現すものばかりではない。多くの場合、説明しきれない違和感や孤独から始まります。そんな「名前がつく前の困りごと」が、ここにはあります。そして、それを無理に整理せず、まず受け止めようとする人たちがいる。その姿を見て、社会課題という言葉が、身近なものに感じられた気がしました。

笹塚十号のいえ 東京都渋谷区



「あなた」の困りごとを 「まち全体」で解決する

続いて向かったのは、東京都渋谷区笹塚。新宿から電車で数分という都心に近いまちにある「笹塚十号のいえ」です。笹塚の商店街の一角で、八百屋さんの空き店舗を改装してつくられました。コンセプトは“屋根のある公園”。目的がなくても立ち寄れて、何もしなくても咎められない。旭川で感じた安心感と、どこか通じるものがありました。

立ち上げたのは、社会福祉士の戸所信貴さんです。戸所さんは、地域包括支援センターで働く中で、高齢者の貧困や認知症などが重なり合い、制度の網からこぼれ落ちて孤立する人々を見てきました。「公的な支援現場だけでは届かない現実がある」と痛感したと言います。2019年、戸所さんは行政を離れ“まちのお手伝いマネージャー”として活動を始めました。電球の交換や窓の掃除、衣替えなど、制度外の生活に必要な要件を担います。月に100件以上寄せられる依頼にも対応しています。

もうひとりのキーマンが左京泰明さん。戸所さんの想いを仕組み化する相棒です。戸所さんはかつて、運転資金を捻出するためにアルバイトをして稼ごうと考えた時期があるそう。それでは支援の時間が減ってしまいます。そうした課題を経営の視点から解決するのが左京さんの役割です。地域の複数団体で笹塚十号のいえの家賃を出し合う仕組みもつくりました。就労継続支援B型事業所や子ども食堂を提供するNPOなど、近隣の民間組織で集まり、隔週で地域課題を共有しています。ひとつの団体では解決できない課題でも、まちのどこかに解決できる人がいる。そう信じて、情報と関係性を開いておく。そうすることで、困りごとは個人の問題ではなく、まち全体で向き合うものへと変わっていきます。



第3の家族

<https://daisan-kazoku.net/gedokun>

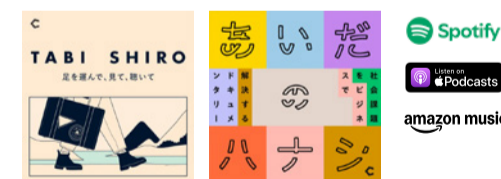
今、本当に必要なのは 誰かを頼れる安心感

帯広の「スマイルリング」は、児童養護施設を退所した若者や、少年院を出たあとに頼れる居場所を持たない青年たちの居場所です。児童養護施設では原則18歳まで、少年院も概ね20歳で退所を求められます。多くの若者は成人と同時に、住まいも人間関係も一気に失われます。頼る先がないまま社会に出ることになってしまいます。代表の堀田豊稔さん自身、非行や少年院を経験してきました。犯罪はあってはならないことですが、生育環境の中で、「非行でしか評価されなかった」というケースがあるのも事実です。「普通の家に生まれたかった」。堀田さんは、そう口にした若者の言葉が、今も胸に残っているそうです。スマイルリングでは、自立援助ホームでの共同生活や、温かな食事、就労の伴走支援を通じて、頼り先のない若者たちの実家のような機能を担っています。

一方で、居場所は必ずしも「リアルな場」だけではありません。事情があって家から出られない人や近くに足を運びたい居場所がない人もいます。そうした若者たちに向けて活動しているのが、オンラインを主な拠点とする「第3の家族」です。代表の奥村春香さんは、身近な家族を自死で失った経験から、「大人になる前に死にたい」と思う若者をひとりで減らしたいと願い、この活動を立ち上げました。

10代の若者を中心に匿名で悩みを吐き出せる掲示板「gedokun」や、困りごとの解決策を共有する「nigeruno」を通じて同じような境遇の誰かと繋がっていきます。リアルとオンライン、それぞれの場で、居場所のかたちは違って、共通していたのは「ひとりにしない」こと。いつでも誰かと繋がってられる、誰かを頼れるという安心感の醸成こそが、制度の外側で人を支えることの本質なのだと感じました。

毎週配信中



SHIROブランドプロデューサー 今井浩恵と
ノンフィクションライター 泉秀一によるPodcast

TABI SHIRO ～足を運んで、見て、聴いて～ | 毎週日曜配信
SHIROを語る上で欠かせない「旅」。今井浩恵が世界中を旅して、実際に見たこと、聴いたこと、そこから得た「学び」を語り、物事の本質に迫っていく番組。 #タビシロ
▶noteも毎週配信 <https://note.com/shiro2009>

あいだのハナシ | 毎週水曜配信
SHIROが手掛ける、北海道砂川市の砂川パークホテル・リニューアールプロジェクトを題材に、さまざまな社会課題をビジネスで解決していくプロセス、「あいだ」をお見せする現在進行形のドキュメンタリー番組。 #あいだのハナシ

知る、考える、関わる。 シロ財団が目指す 誰も排除されない社会

社会を良くするために、SHIROは立ち止まり、考えました。
制度や仕組みだけでは、届きにくい現実があること。
そして、その現実のそばには、見えにくい社会課題があること。
誰も排除しない社会とは何か。
その問いから、「シロ財団」は生まれました

制度で救われない課題がある シロ財団が向き合いたいこと

SHIROは2025年に、一般財団法人 シロ財団を立ち上げました。民間企業である私たちが財団を立ち上げた理由は、シンプル。SHIROの経営を通じて得た利益を、社会のために役立てたいと考えたからです。お客様、関係者の皆様に支えられて、2009年のブランド発足当初からSHIROの事業規模は拡大し、売上も着実に伸びてきました。その利益に伴い、納める法人税の額も増えています。もちろん税金は、国や自治体を通じて社会を支えるための大切な仕組みです。多くの人の暮らしを守る基盤として、欠かすことのできない役割を果たしています。

一方で、私たちはさまざまな場所を訪れ、人に会おう中で、税金や国の制度だけでは十分に行き届かない社会課題が、数多く存在していることも知りました。家族との関係が悪く家に居場所のない若者、家の電球を変えられない一人暮らしの高齢者、病気や発達特性のために、仕事に就きにくい人。困っている現実はあるけれども、制度が追いつくまでに時間を要する課題が、確かにあります。

そうした状況を前にして、私たちは考えるようになりました。国や自治体が担う役割とは別に、民間企業としてできることがあるのではないかと。税金での課題解決という仕組みを補い、並走するかたちで、目の前の課題に向き合う方法があってもいいのではないかと。でも、社会課題に向き合う取り組みを、ひとつの企業だけで進めていくには限界があります。時間や視点、関われる範囲にも制約があります。だからこそ、同じ思いを持つ仲間とともに考え、動いていくための器として、シロ財団を立ち上げました。

シロ財団基金 SHIRO Foundation Fund

支援対象

〈対象となる活動内容〉
社会において生きづらさを感じたり困ったりしている人たちにとっての居場所をつくり提供している団体。また、彼らの生活を助けたり支えたりしている団体。そのうち特に、人的リソースや資金面で支援を必要としている団体をより優先的にサポートします。

〈対象の選び方〉
助成の検討にあたり公募および活動を行う中で生まれた繋がりから、複数回、財団メンバーとの対話を重ねる中で財団が助けになれること、助成を通じて対象団体と一緒に目指すことを話し合い、検討していきます。

〈対象団体の地域や属性〉

- ・原則、日本国内で活動する組織
- ・非営利組織
- ・オフライン／オンラインは問わない
- ・活動開始から1年以上経過している組織

〈対象外条件〉

- ・反社会的な組織
- ・活動を継続していくことを前提としない単発的なプロジェクト
- ・特定の宗教や政治思想にもとづく活動を目的とした団体
- ・偏見や差別を助長する活動を行っている組織

POLICY

どんな組織のため、何のために活動するのか？

- ・社会で生きづらさを感じたり、困ったりしている方たちにとっての居場所をつくり、運営している団体
- ・誰も何も排除しない社会をつくるシロ財団の想いを共有し、社会にとって必要で価値ある活動をしている団体のうち、活動の継続や拡大のための支援を必要としている団体

支援とは？

- ・資金に限らず、寄付や資金調達に必要な発信ノウハウや人的リソースなどの組織支援も含まれます。
- ・有期の助成が終了した後も団体が活動し続けられる状態を目指し、伴走支援を行います。

価値観と判断軸

- ・世の中をしあわせにすること
- ・誰ひとり排除しない
- ・正しさよりも、事実と受容



誰も排除しない社会をつくる そのきっかけは「知ること」から

誰も排除しない社会をつくる。

これが、シロ財団の根底に流れる想いです。ただ、この言葉は決してきれいごとではありません。誰も排除しない社会をつくることは、簡単ではないからです。私たちの社会は、効率や合理性を重視することでこれまで豊かさを積み重ねてきました。より早く、より安く、より多く。その仕組みは、多くの人に便利さや快適さをもたらしてきた一方で、その流れに乗りづらい人を生んできたのも事実です。

誰かを排除しようとして、排除しているわけではありません。多くの場合、それは無意識のうちに起きています。「大変そう」「関わり方が分からない」「自分には関係がない」。そんなイメージや距離感が積み重なり、気づかないうちに遠ざけてしまっている。悪意はなくても、結果として誰かが社会の外側に追いやられてしまうことがあります。さまざまな場所を訪れ、人に出会う中で、そうした現実を目にしてきました。困りごとを抱えていても声を上げられない人。助けを求める方法を知らない人。あるいは、自分が困っていることにさえ気づけていない人。排除は、目に見える形だけで起きていくわけではありません。

だからこそ、私たちはまず「知ること」が大切だと考えています。どんな人が、どんな背景で、どんな日常を生きているのか。知ること、これまで見えていなかった現実が浮かび上がってきます。そして、知ったことを社会に開き、伝えていくこと。その積み重ねが、無意識の距離を少しずつ縮めていくのだと思います。

関わろうとする試行錯誤が 社会を良くするための道筋

「誰も排除しない社会」とは、すべてを完璧に包み込む社会ではありません。見えにくかった存在に光を当て、遠ざけてきた現実と向き合い続ける社会なのだと思います。シロ財団は、社会を良くする活動をしている団体と一緒に、その輪を広げていきます。理念や活動に共感した団体に資金を提供する、いわゆる財団としての役割は、私たちの活動の出発点です。NPOやNGOは、資金と同じくらい、あるいはそれ以上に、人や知恵、時間が足りていないからです。現場には課題が山積していますが、それらは必ずしもお金だけで解決できるものではありません。

シロ財団には、視覚化や場づくりを強みとするデザイナーや資金やスケジュール管理を現実的に設計できるプロジェクトマネージャー、現場での実務経験を重ねてきたNPO法人の代表など、多様なメンバーが集っています。私たちは、支援先の団体が抱えている課題に応じて、こうした知見やスキルを持ち寄りながら、一緒に考えていきます。正解を示すのではなく、問いを共有し、課題の解決策を探していく。その試行錯誤の時間そのものが、「誰も排除しない社会」への道筋なのだと思うのです。

この活動は、短い時間で成果が見えるものではありません。遠回りに見える一歩が、後になって大きな意味を持つこともあります。だからこそ、急がず、丁寧に関わり続けることを大切にしたい。見えにくい現実を光を当て、誰かの声に耳を傾け、その事実を社会に開いていく。その積み重ねが、社会の温度を少しずつ変えていくと信じています。シロ財団は、そうした歩みのきっかけのひとつになる存在として、これから活動を続けていきます。

すでに起きている変化と SHIROが見据える未来

2023年の終わりにSHIROが表明した100年後の未来を想定し、社会を循環させるための「15年目宣言」さまざまな工夫を凝らしてきた取り組みを数字で振り返ります。



UNIFORM

48.5%

制服のリユース率 SHIROでは、汚れやシミがついた廃棄予定の制服を染め直してリユースがスタートしました。2025年は268枚の制服をリユース。ミナモア広島店では「藍屋テロワール」に依頼して藍染めで、渋谷PARCO店では「野口染舗」に依頼してヨモギや白樺の廃液などの天然素材を使って草木染めています。ひとつとして同じ色を持たない世界に1枚だけの制服として生まれ変わりました。

#リユースプロジェクト

LOCAL WOOD

100%

森林資源の循環利用率 地域社会に根ざし、循環型の施設を目指すため、すべてを開いた「みんなの工場」。その敷地内に森のことを大切に想う人たちが手がけたレストラン「MORISHIRO」。シンボリックな円形の建物のうち木造部分63.17㎡に北海道産のカラマツを使用。家具にはイタヤカエデ、バックルームにはトドマツなどが使われています。どれも森の持続性に配慮した活動をする木こりから直接購入し、どこから来た木材が分かるものばかりです。

#トレーサビリティ #森の循環

TRACEABILITY

57.6%

地産地食率^{※6} 木こりが森を適切に管理する上で生じる間伐材を使った薪火で調理する料理。食材33品目のうち19品目が道産を使用しています。また、つくり手が自ら森に入り採取する植物やSHIROの製品で使用している自然素材、「シロ農園」で収穫を終えた茎や葉などを使い、余すことなく恵みを活かす自家製調味料をつくっています。壁一面に色とりどりに並ぶ25種の調味料は季節のお料理とともに提供します。

※6 | 地産地食とは、地域で生産された農林水産物を、同じ地域内でいただくという考え方

#トレーサビリティ #森の循環

COMPOST

69.5%

生ゴミリサイクル率 MORISHIROやみんなの工場内にある「SHIRO CAFE」の調理場、製造の工程で発生する生ゴミは、施設内のコンポストで堆肥にしています。堆肥はみんなの工場内にあるシロ農園で使われ、昨年は21種を超える野菜を収穫しました。春からはコース料理にも少しずつ彩りを添えていきます。

#廃棄物ゼロ

INGREDIENT

53.1t

使用した自然素材 SHIROの素材選びは、本来廃棄されるはずだったものや規格外のものに価値を見出し恵みに変え、循環をつくりだすこと。SHIROが今までに使用した自然素材—ゆず、ヨモギ、白樺、日高昆布など—これらの総量は53.1t^{※1}。日本各地の生産者から託された想いと素材の力を引きだし生み出された337品の製品。気候変動で年々環境の変化が起きていると生産者からお聞きします。SHIROは変わらず「すでにそこにあるもの」から生み出し、社会を良くしていくことを続けていきます。

※1 | 素材総量は、2014年～2025年の累計から算出しています。

FRAGRANCE

83.2%

香料のレスキュー率 IFRA（国際化粧品香料協会）の規制変更に伴う製品リニューアルなどが理由で、香料が倉庫に残っていました。思い描いた香りをつくるため、新たに香料を購入するのではなく、すでに手元にある香料を使って、唯一無二の香りをつくる。「ZERO COLLECTION」はそんな想いから誕生しました。工場で余っていた香料の83.2%を利用でき、この2年で516,364本^{※2}の新たなフレグランスが誕生しました。

※2 | 2024年、2025年発売の累計から算出しています。

#廃棄物ゼロ

BOTTLE

81.3%

容器のレスキュー率 廃番などの理由により使えなくなってしまった未使用容器854,286本^{※3}が倉庫に眠っていました。2024年から2年間で「ZERO COLLECTION」や「みんなの工場」の「ブレンダーラボ」^{※4}にて、81.3%を使用。使われなくなった資源を活かしたいという想いを、容器の形状はそのままに、目的を変えて製品にすることができました。

※3 | 2023年12月までの未使用容器累計を算出しています。
※4 | ブレンダーラボとは、みんなの工場内にあり、自分で香りを作成できるものづくり体験ができる場所。世界にひとつの自分だけの香り「マイフレグランス」がつくれます。

#廃棄物ゼロ

SHOP

72.9%

アップサイクル資材使用率 2023年から取り組んでいる“捨てない、新たにつくり出さないお店づくり”。できる限りパーズン材を使わずに、その土地にある資源を使ってお店づくりをしています。2025年12月に韓国のTHE HYUNDAI SEOULで実施したポップアップストアは、“借りて返す、そして捨てない”という考え方でつくりました。全什器15.4㎡のうち72.9%の資材を再活用し、新規でつくったロゴサインなどは、次のお店で活用します。

#廃棄物ゼロ



SEED

たねプロジェクト 創業の地、北海道砂川市にあるみんなの工場で2021年から取り組んでいる「たねプロジェクト」。砂川市の在来植物を守り育てていくプロジェクトです。ワークショップに参加いただいた皆様と森に入り、在来種の種を拾い、苗を育て、成長したら植樹する。木の実が大凶作だった2025年に採取できた種は、わずか10粒ほど。しかし、4年続けて育ったポットの苗がそろそろ植樹できる時期に。春に400本の苗を工場内に植樹予定。50年後、育った木で誰かの家具をつくる。そんな生態系を未来に残す“森の循環”を願った取り組みです。

#たねプロジェクト

採取した種

3,610粒

発芽した苗

1,550株

植樹予定の苗

400本



REUSE BOTTLE

10,806本

回収したリユースボトルの累計 SHIROでは、使用済みガラス容器を回収し、リユースすることに取り組んでいます。2025年は4,533本を回収しました。2024年から累計10,806本の使用済みガラス容器を回収して、そのうち6,826本を再利用して、限定フレグランスとして生まれ変わらせました。リユースが日常になる未来を目指し、今後も使用済みガラス容器の回収を続けます。

#SHIROリユースプロジェクト

HOMETOWN TAX

約30億円

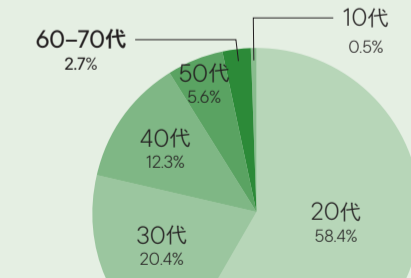
29.4億	北海道 砂川市	2021-
2,900万	北海道 足寄町	2023-
3,100万	北海道 栗山町	2023-
276万	北海道 愛別町 ^{※5}	2025-
189万	徳島県 那賀町 ^{※5}	2025-

ふるさと納税 創業の地である砂川市に始まり、2025年までに素材の生産地である5つの自治体と連携。集まった寄附金が、SHIROにとって大切な地域に役立てられています。

※5 | 北海道愛別町及び徳島県那賀町は、2025年12月からの数値算出

#社会とのつながり

WORK ENVIRONMENT



キャリア選択制度 多様性を尊重し、自由なキャリアを選択できる環境づくりをしています。「定年退職制度の撤廃」と新たな採用方法「シニア採用」を導入。スタートから3年、現在20人が在籍。従業員が年齢にとらわれずに自身の将来を自由に考えキャリアを追求できる体制をつくり、個々の能力や可能性の最大化を目指しています。

#人生100年時代 #ダイバーシティ

EARLY WEEKEND

週休2.5日

働き方改革 株式会社シロでは2026年4月から週休2.5日制をスタートさせます。1日9時間勤務することで、週休2.5日を実現。月の労働時間数も、給与も変わりません。効率的に時間を使う挑戦です。この制度によって各スタッフが自由に過ごせる時間を増やし、社会へ目を向けることを目的としています。それらの時間で学び、体験した経験を会社や社会に新しい価値として循環させるための一歩です。

#ワークライフバランス



SHOP LIST

北海道

SHIRO 砂川本店	北海道砂川市豊沼町54-1 みんなの工場内
SHIRO 札幌ステラプレイス店	北海道札幌市中央区北5条西2-5 JRタワー 札幌ステラプレイス センター B1F

関東

SHIRO 表参道本店	東京都渋谷区神宮前5-2-7 2F
SHIRO BEAUTY 表参道本店	東京都渋谷区神宮前5-2-7 B1F
SHIRO ルミネエスト新宿店	東京都新宿区新宿3-38-1 ルミネエスト新宿 B1F
SHIRO 伊勢丹新宿店	東京都新宿区新宿3-14-1 伊勢丹新宿店本館1階=イセタンビューティーコスメティックス
SHIRO 丸ビル店	東京都千代田区丸の内2-4-1 丸ビル B1F
SHIRO 銀座三越店	東京都中央区銀座4-6-16 銀座三越 地下1階 ギンザコスメワールド
SHIRO 渋谷PARCO店	東京都渋谷区宇田川町15-1 渋谷PARCO 1F
SHIRO +Q (プラスク) ビューティー 渋谷スクランブルスクエア店	東京都渋谷区渋谷2-24-12 渋谷スクランブルスクエア ショップ&レストラン6階
SHIRO 渋谷ヒカリエ ShinQs 店	東京都渋谷区渋谷2-21-1 渋谷ヒカリエ ShinQs 1F
SHIRO ルミネ池袋店	東京都豊島区西池袋1-11-1 ルミネ池袋 B1F
SHIRO 玉川高島屋 S・C 店	東京都世田谷区玉川3-17-1 玉川高島屋 S・C 南館1F
SHIRO ルミネ北千住店	東京都足立区千住旭町42-2 ルミネ北千住 3F
SHIRO ルミネ横浜店	神奈川県横浜市西区高島2-16-1 ルミネ横浜 1F
SHIRO ルミネ大宮店	埼玉県さいたま市大宮区錦町630番地 ルミネ大宮店 ルミネ2 3F
SHIRO/TIAT DUTY FREE BEAUTY	東京都大田区羽田空港3-4-2 第2ターミナル3階 国際線出国エリア内

中部

SHIRO タカシマヤ ゲートタワーモール店	愛知県名古屋市中村区名駅1-1-3 タカシマヤ ゲートタワーモール 6F
SHIRO ジェイアール名古屋タカシマヤ店	愛知県名古屋市中村区名駅1-1-4 ジェイアール名古屋タカシマヤ 3F 化粧品

近畿

SHIRO 大丸京都店	京都府京都市下京区四条通高倉西入立売西町79 大丸京都店1F
SHIRO ルクア イーレ店	大阪府大阪市北区梅田3-1-3 ルクア イーレ 2F
SHIRO 阪急うめだ店	大阪府大阪市北区角田町8-7 阪急うめだ本店 3F HANKYU BEAUTY
SHIRO 大丸心齋橋店	大阪府大阪市中央区心齋橋筋1-7-1 大丸心齋橋店本館1F
SHIRO 大阪タカシマヤ店	大阪府大阪市中央区難波5-1-5 高島屋 大阪店 1階化粧品売場
SHIRO 大丸神戸店	兵庫県神戸市中央区明石町40番地 大丸神戸店 本館 1F 化粧品

中国・四国

SHIRO ミナモア広島店	広島県広島市南区松原町2-37 ミナモア 2F東
---------------	--------------------------

九州

SHIRO 岩田屋店	福岡県福岡市中央区天神2-5-35 岩田屋本店 本館1階=化粧品
SHIRO 博多阪急店	福岡県福岡市博多区博多駅中央街1-1 博多阪急 1F 化粧品

Taiwan

SHIRO 新光三越台北信義新天地A11店	台湾台北市信義區松壽路11號1樓
-----------------------	------------------

South Korea

SHIRO Seongsu	57, Yeonmujang-gil, Seongdong-gu, Seoul, Korea
SHIRO LOTTE WORLD MALL	1F, 300, Olympic-ro, Songpa-gu, Seoul, Korea

UK

SHIRO Monmouth Street	Ground Floor, 63 Monmouth Street, London, UK
-----------------------	--

SHIRO REPORT 2025

発行：株式会社シロ
お問い合わせ
TEL: 0120-275-606
MAIL: info@shiro-shiro.jp

編集長：今井浩恵
Editor in Chief: Hiroe Imai

クリエイティブ・ディレクター &
表紙写真：佐々木信 (3KG)
Creative Director &
Cover Photograph: Shin Sasaki

ライター：泉秀一
Writer: Hidekazu Izumi

発行人：福永敬弘
Publisher: Takahiro Fukunaga

グラフィックデザイナー：石田愛実 (3KG)
Graphic Designer: Manami Ishida

編集：菅野幸子
Editor: Sachiko Sugano

編集：河合裕子
Editor: Yuko Kawai

編集コミュニケーター：イ・ジナ
Editorial Communicator: Jina Lee

翻訳・校閲：ソ・ハナ
Translator & Proofreading: Hana Seo

Thanks to:
竹田郁 / 福山萌子 / 山下郁子 /
LimTaehee / 大辻誠司 / 奥村春香 / 戸所信貴 /
左京泰明 / 堀田豊稔 / 小倉寛之 / 高山泉 /
望月亜希子 / 室松玲子 (敬称略・順不同)

Copyright © SHIRO Co., Ltd.
All Rights Reserved.
本誌掲載の写真、イラストレーション、記事、
ロゴの無断転載および複写を禁じます

shiro-shiro.jp
@shiro_japan
@shiro_sunagawa
@maisonshiro_
@sunagawa_parkhotel

